

# 八重山諸島の考古学

## 3. 下田原期の特徴

この時期が、八重山諸島で暮らした人々が道具を残した最も古い時期です。九州以北では縄文時代後期～晩期、沖縄諸島周辺では貝塚前IV～V期に相当します。先述のように、先島諸島では独自の編年を利用することから、ここでは「下田原期」として扱います。下田原期の遺跡は、放射性炭素年代測定の結果から約4,300年前～3,500年前に中心があると考えられ、その終末期は定かではありません。

### (1) 遺跡の立地

近年の地質・地理学的研究から、下田原期の海水準高度は、石垣島を例にすると現在よりも約0.2m～1mほど高かったようです(河名2008)。石垣島の名蔵湾を例にすれば、現在、名蔵アンパルと呼ばれる湿地部分はほぼ水面下となり、現在はかなり内陸よりに思える大田原遺跡や平地原遺跡は、海にかなり近い赤土台地上に立地していたこととなります(図4)。

下田原期の遺跡は、2008年3月現在で与那国島のトゥグル浜貝塚を含めて15遺跡が確認されていましたが(石垣市2008)、白保竿根田原洞穴遺跡の洞口付近の土砂から下田原式土器の把手付きの破片が採集され、さらに発掘調査によって包含層を確認(沖縄県立埋蔵文化財センター2009、片桐2010、片桐ほか2012)、西表島鹿川のウブドー遺跡でも包含層が確認されたことで(竹富町教育委員会2009)、17遺跡となっています。

標高は3m～13mの間に多く立地します。石垣島の名蔵湾から崎枝半島、川平半島にかけては、10m前後の遺跡が多く、石垣島の南西部や川平吉原から北東側にかけては3～5mほど、西表島では南東部で6～7m、北東側では10m前後が多くなっています。なお、2010年に確認された白保竿根田原洞穴遺跡の下田原期の包含層は、標高30mほどです。同じ島の中でも標高だけを見ると違いがあるように見えますが、川の河口付近や、湧水の近くというのはどの遺跡も同様であり、海へのアクセスが比較的容易な場所を選択しています。基本的には共通点が多いと言えます。

以上のことを整理すると、①海からほど近い赤土台地、②(新期砂丘～)現砂丘の下層にある内陸よりの古砂丘上、③真砂などの山砂が堆積した内陸部の小砂丘のいずれかに該当しています(石垣市2008)。

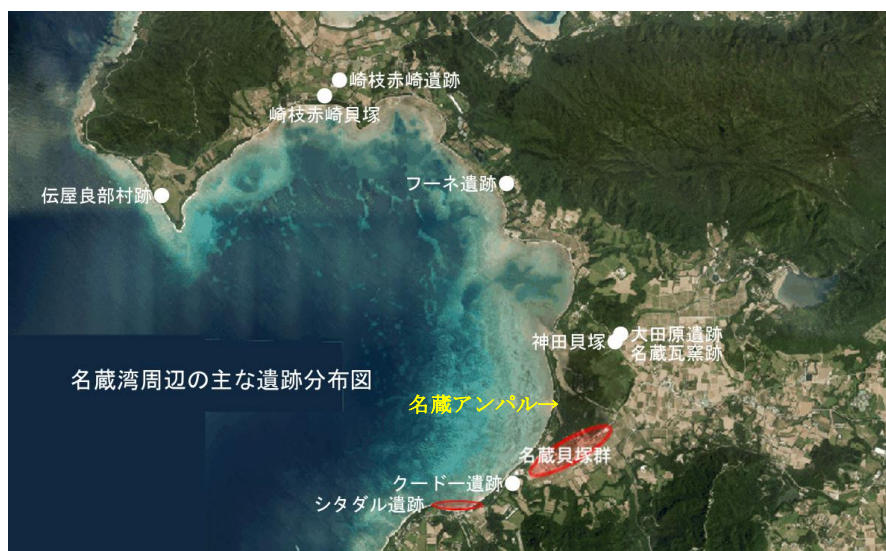


図4 名蔵アンパル周辺の遺跡分布

## (2) 遺構

発掘調査では住居跡や炉跡と考えられるものなどが検出されました。石垣島の大田原遺跡では、5つの「遺構」が確認されています。そのうち第1～4号遺構までが先史時代のものとされ、いずれも2.5mほどの円形で、円の内側が凹んでいます。これらの遺構について報告書中の解説では、炉跡が見つからなかったことや、柱穴と考えられるピットがほとんど見つかっていないことなどを挙げ、住居としての明言を避けていますが、平面実測図を掲載した図の説明では「竪穴遺構配置図」と紹介しています。このことから、住居としての可能性を含んだものと考えられます（石垣市教育委員会1982）。

石垣島のピュウツタ遺跡では住居跡は見つかりませんが、円形石列遺構が見つかりました。直径約1mの円形をなしていたと思われるもので、内部からは炭化物が見つかりました。配された石のほとんどはトムル層に由来する黒色片岩です。黒色片岩は遺跡の南東側にある於茂登トンネル付近に多く分布しており、火を受けても割れにくい性質があります。これらのことから、炉跡の可能性が高い遺構と考えられています（石垣市教育委員会1997）。

波照間島の下田原貝塚では柱穴が複数見つかりますが、プランは把握されていません。また、炉跡も6つ確認されていて、ひとは長径1.7m、短径90cmの大きなものです。家屋の形態は分かっていませんが、柱穴の周囲にも掘り込まれたような形跡が見られないことから、大田原遺跡とは異なり、「平地式住居」であった可能性が示唆されています。ほかに、遺跡北側の低くなった部分に浅い溝状遺構が見つかり、排水機能が推定されました（沖縄県教育委員会1986）。

多良間添道遺跡、与那国島トゥグル浜遺跡は、明確な遺構は見つかりませんが、遺物が集中して見つかる層に、礫の広がりや小穴などが確認されています。

## (3) 食料残滓

オセアニア地域において、下田原期とほぼ同時期に確認されるラピタ遺跡では、早くからタロイモやヤマイモを栽培していた痕跡が見つかりました。また、台湾では稲作開始も指摘されています。しかし、八重山諸島においては、そのいずれの栽培痕跡も未発見です。遺跡から出土するのは主に貝殻や骨類です。

貝類について見てみると、シャコガイ類やチョウセンサザエ、サラサバテイ、ヤコウガイ、ホラガイ、クモガイ、スイジガイ、リュウキュウサルボウ、シレナシジミなどが、ほとんどの遺跡で出土しています。マングローブ域や内湾の砂地以外に、イノー（礁池）の中や礁斜面およびその下部など、潜水が必要な場所からも、貝を捕っていたようです。

魚類は、フダイ科（図5）が多く遺跡で出土します。全体的にはサンゴ礁域やリーフの外縁などに生息する魚が多く、これらは貝の採取場所とも一致します。爬虫類のカメや哺乳類のジュゴンの骨なども、貝や魚ほどではありませんが、出土しています。

陸の動物では、圧倒的にリュウキュウイノシシの出土量が多く、イノシシが生息していない波照間島や与那国島、多良間島の遺跡からも出土しています。リュウキュウイノシシは肉を食するだけでなく、その骨は道具の材料にもなっています。

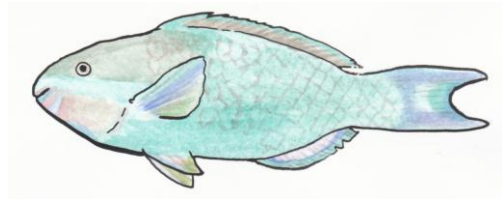


図5 フダイ（方言：イラブチャー）

## (4) 人工遺物

### 1) 下田原式土器

下田原期の遺跡からは、土器、石製品、貝製品、骨製品などが出土しています。特に、下田原式土器は他地域と比較してみても、独特な要素を持っており、その形態は南方文化との関係性が

指摘されます。

下田原式土器は、丸底に近い平底が多く、口縁部は内彎、僅かな外反、直口するものがあります。ほとんどの器種が浅い鉢形ですが、小形の土器や深鉢形土器も確認されています。胎土には石英や長石などを多く含み、器壁は1cmを超えるものが多くみられます。把手は牛角状のものが特徴的ですが、中には、小型のものや、稀に横耳や縦耳もあります。無文資料を主体としますが、数種類の文様パターンも見られ、中でも爪形文がもっとも多く、沈線文、刺突文もあります（石垣市2008）。

復元された資料（図6）を見ると、口径は10cm～15cmのものが多く見られます。20cmを超えるものも、少量ではあるが確認されました。混和材の石英や長石は、それらの鉱物を産しない波照間島や多良間島から出土する土器片にも共通で、粘土または土器の完成品を、石垣島や西表島から持ち込んだと考えられます。

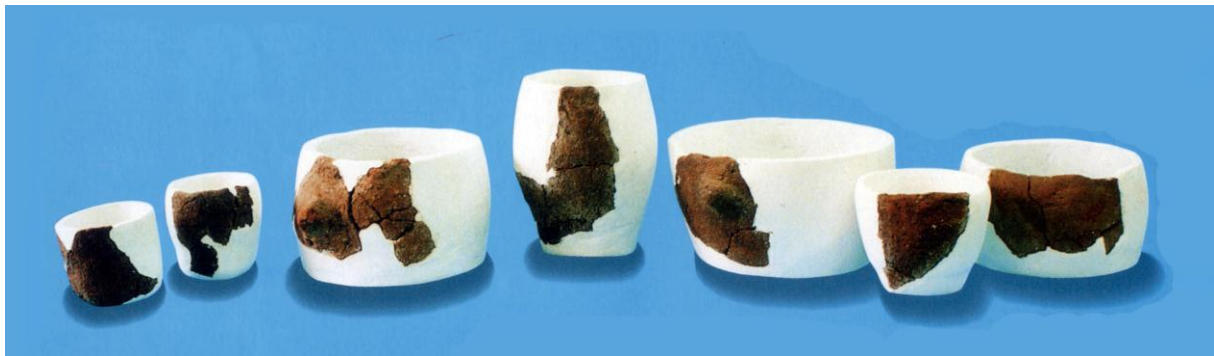


図6 ピュウツタ遺跡（石垣市字川平）出土の下田原式土器

この土器文化の源流については、大きく台湾以南の地域と考えられてきました。台湾を經由したかどうかについては、台湾大学の陳有貝が、遺物論だけではなく生業という視点を加えて検討しています。その結果、八重山諸島で下田原式土器が隆盛した時期、台湾ではすでに稲作も行われ定住生活に入っていることや、出土する遺物から台湾では外海の漁労が少なく、舟の技術が発達していなかったことを述べて、台湾からの移動を否定的に捉えています（陳2004）。しかしながら、近年、台東縣で実施された発掘調査において、海岸付近の遺跡から積極的な対外交流の痕跡が見つかっているという情報もあります（国立台湾史前文化博物館所蔵資料より）。このように、ルーツに関しては未だ定説はありませんが、その想定される起源については概ね中国大陸南部や台湾、さらに南東の島々などで一致しています。

## 2) 石製品

石製品の中でも、特に石斧の出土は目立ち、研究が進められています。この時期の石斧は、甚部を中心に磨く傾向があります（図7）。石斧以外には、磨石、敲石、石皿、砥石、石製利器、円盤形石器（扁平円礫）、凹石、剥片石器、有孔石製品などが出土しています。特に、石斧を含め磨石、敲石、石皿、砥石などは、ほとんどの遺跡に共通して出土が確認できます。この中で、円盤形石器とされたものは、緑色片岩や斑糲岩、砂岩、サンゴ等を利用した直径5cm前後の円盤状の石製品です。これらの用途については錘としての可能性も考えられていますが、金関丈夫らは、「土器製作の際に扁平円礫を器面調整に使用する例」があるとして、同資料の用途を検討しています（金関ほか1979）。後述する無土器期の遺跡から出土が見られないことからすると、その可能性も否定できません。

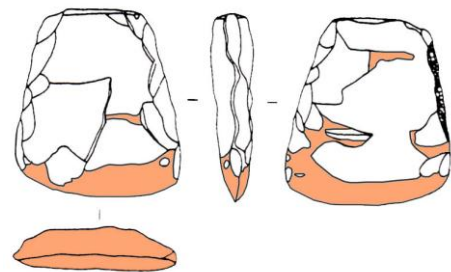


図7 ピュウツタ遺跡出土の石斧  
（着色部が磨かれた部分）

### 3) 貝製品

貝製品は、仲間第二貝塚（西村ほか1960）、下田原貝塚（金関ほか1964、西村ほか1960、沖縄県教育委員会1986）、多良間添道遺跡（多良間村教育委員会1996）、トゥグル浜遺跡（沖縄県教育委員会1985）で出土しています。多くの遺跡が赤土台地上に立地するためか、貝製品の出土は土器や石製品に比べると少ないです。しかし、その中でも、実用品や装飾品が、いくつか見つかっています。実用品にはスイジガイやクモガイなどを使った利器や、螺蓋製貝斧・螺蓋製斧・螺蓋製敲打器（具）などと呼ばれるヤコウガイの蓋製品、貝匙などがあります。

実用品または装身具は、いずれの用途も考えられる資料です。二枚貝有孔製品やタカラガイ製品、その他の有孔製品等が出土しています。先島諸島の遺跡においても、二枚貝有孔製品の中には貝錘として報告されているものが多いですが、使用痕が残っていない資料も多くみられます。そのため、報告書によっては、単に二枚貝有孔製品等の名称で報告されている例もあります。また、タカラガイ製のものには貝錘と報告されたものもありますが、貝種によってもその用途が異なる可能性もあります。民俗事例でもこれらの貝を装身具に利用する例は見られ（図8）、使用痕の問題や出土個数の問題などを含めて、ひとつひとつの遺跡の出土状況に



図8 台湾パイワン族の民族衣装

に応じた検討が必要です。装身具にはほかに、巻貝の螺頭部を利用したビーズなどもあります。

### 4) 骨・歯牙製品

骨や歯、牙を使った製品も出土数としては多くありません。出土が確認されたのは、下田原貝塚（金関ほか1964、沖縄県教育委員会1986）とトゥグル浜遺跡（沖縄県教育委員会1985）です。実用品として骨針やノミ状製品（ヤス・刃器）、骨錐とされたものなどがあり、それらの素材にはイノシシの骨や牙が利用されています。実用品または装身具の可能性のあるものには、サメ歯製品があります。メジロザメ科（イタチザメ）の歯を利用したものが多いですが、下田原貝塚（沖縄県教育委員会1986）ではアオザメの歯を利用したものも出土しています。サメ歯製品は南西諸島各地で出土が確認されていますが、八重山諸島では奄美諸島や沖縄諸島で出土する、骨や貝を使ったサメ歯模造品が出土していません。その用途については、装飾品、ペンダント、鏃（ヤス）などが考えられています。

装身具に分類されたものは、イノシシの牙製とイヌの牙製品、エイやサメの骨やウツボの骨に孔を開けた有孔製品などがあります。いずれも垂飾品と考えられているものです。

### (5) 下田原期とは

ここまで、下田原期の概要を紹介しました。俯瞰的に見た場合、遺物組成は他地域のそれと大きく違わないように見えるかもしれませんが、しかし、土器型式、石製品一特に石斧の出土量、その他遺物の製作技法等で、南島の他の地域とは異なる要素が指摘されているのです。

また、先の編年研究で紹介したとおり、下田原期は、開始期が明確ではありません。発掘調査の成果で現在分かっていることは、おおよそ4,000年ほど前には八重山諸島を中心に存在し、北は多良間島までその分布が確認できます。この頃の周辺地域の文化はどうだったかという点、すでに台湾には先史文化の存在がありますが、オセアニア地域のラピタ遺跡よりは、出現が早いと

考えられています（国立民族学博物館編2007）。

そして、その終末期も明確ではないのです。現在、下田原期とそれに続く無土器期との間、「未発見の空白期」と示した時期に、巨大な津波の存在を示す研究成果もあります（河名2009、Araokaほか2013）。この空白期が埋まる、もしくは下田原期の開始期を示す包含層が発見されるという可能性は否定できませんが、こういった自然災害や海水面の変動による居住空間の移動も視野に入れて、同時期を考えていく必要があります。

### <参考・引用文献一覧>

- 石垣市 2008「下田原期のくらし—八重山諸島最古の土器文化—」『石垣市史考古ビジュアル版』第2巻 石垣市
- 石垣市教育委員会 1982『大田原遺跡—沖縄県石垣市名蔵・大田原遺跡発掘調査報告書—』石垣市文化財調査報告書第4号 石垣市教育委員会
- 石垣市教育委員会 1987『崎枝赤崎貝塚—沖縄県石垣市崎枝赤崎貝塚発掘調査報告書—』石垣市文化財調査報告書第10号 石垣市教育委員会
- 石垣市教育委員会 1997『名蔵貝塚ほか発掘調査報告—名蔵貝塚・ピュウツタ遺跡発掘調査報告書—』石垣市文化財発掘調査報告書第22号 石垣市教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1985『与那国トゥグル浜遺跡—与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第66集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会 1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第74集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009「第4章 洞穴内の出土遺物」『嘉良嶽東貝塚・嘉良嶽東方古墓群—新石垣空港予定地内遺跡発掘調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第50集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 片桐千亜紀 2010「白保竿根田原洞穴調査の概要（白保竿根田原洞穴発掘調査速報2010）」『白保竿根田原洞穴を学ぶ会』白保竿根田原洞穴を学ぶ会実行委員会
- 片桐千亜紀・山崎真治・藤田祐樹 2012「白保竿根田原洞穴遺跡の発掘調査概要」『石垣市立八重山博物館紀要』第21号 石垣市立八重山博物館
- 金関丈夫・國分直一・多和田真淳・永井昌文 1964「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『水産大学校研究報告』人文科学篇9号 水産大学校
- 金関丈夫・國分直一 1979「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『台湾考古誌』法政大学出版局
- 河名俊男 2008「石垣島周辺海域と石西礁湖における最終氷期（約19,000年前）から下田原期（約4,300年～3,300年前）にかけての海面変動、地殻変動、およびサンゴ礁の発達史」『石垣市史考古ビジュアル版』第2巻 石垣市
- 河名俊男 2009「石垣島周辺域における下田原期以降、12世紀前半までの自然環境—“未発見の空白期”と無土器期との関連性に関わる試論—」『石垣市史考古ビジュアル版』第3巻 石垣市
- 国立民族学博物館編 2007『オセアニア—海の人類大移動—』昭和堂
- 竹富町教育委員会 2009『鹿川ウブド—遺跡 埋蔵文化財発掘調査概要報告』竹富町教育委員会
- 多良間村教区委員会 1996『多良間添道遺跡』多良間村文化財調査報告書第11集 多良間村教育委員会
- 陳有貝・森威史（訳） 2004「生業の視点で捉えた台湾と先島諸島との先史文化関係」『南島考古』第23号 沖縄考古学会
- 西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚 1960「八重山の考古学」『沖縄八重山』早稲田大学考古学研究室報告第七冊 校倉書房
- Daisuke Araoka, Yusuke Yokoyama, Atsushi Suzuki, Kazuhisa Goto, Kunimasa Miyagi, Keitaro Miyazawa, Hiroyuki Matsuzaki and Hodaka Kawahata 2013: Tsunami recurrence revealed by Porites coral boulders in the southern Ryukyu Islands, Japan. *Geology published online*. Geological Society of America